

## ソヴェト国家はどうしたら持ちこたえることができるか

このような事態は、わが国に、どのような戦術を指示するであろうか？ あきらかにつぎのようなものである。われわれの労働者権力を維持し、わが小農民と零細農民を、この権力の権威と指導のもとに引きとめるために、われわれは最大限に警戒心を発揮しなければならない。われわれには、全世界がいまではもう、全世界的社会主義革命を生みだすにちがいないような運動にうつっているという、プラスがある。だがわれわれには、帝国主義者が全世界を二つの陣営に分裂させることに成功し、しかも真に先進的・文化的・資本主義的な発展をとげた国であるドイツが立ちあがるのがいまやきわめて困難であるという事情によって、この分裂が複雑なものとなっているという、マイナスがある。いわゆる西欧の資本主義列強のすべては、ドイツをついばみ、立ちあがれないようにしている。他方、人間としてのぎりぎりのところにおしつめられた、数億の被搾取勤労住民を擁する東洋全体は、その物理的・物質的な力が、それよりはるかに小さい西ヨーロッパ諸国のうちのどの一国の物理的・物質的・軍事的な力とも、とうてい比べものにならないような条件のもとにおかれている。

われわれはこれらの帝国主義国家との、きたるべき衝突をまぬかれることができるだろうか？ 栄えつつある西欧の帝国主義諸国家と、栄えつつある東洋の帝国主義諸国家の内的矛盾と衝突が、第一回目とおなじように、いま一度猶予をわれわれにあたえるであろうという希望を、われわれはもてるだろうか？ 第一回目には、ロシアの反革命を支持するために向けられた西ヨーロッパの反革命の遠征が、西欧と東洋の反革命陣営内の、東方の搾取者と西方の搾取者のあいだの、日本とアメリカの陣営内の矛盾によって挫折したのである。

この問題には、つぎのように答えるべきだとおもわれる。すなわち、解決は、このばあい、あまりに多くの事情にかかっており、闘争の結末は、全体としてみれば、地球上の住民の絶大な多数が、結局のところ、当の資本主義によって闘争するように訓練され、教育されるという根拠にもとづいてのみ、予見することができる、と。

闘争の結果は、結局のところ、ロシア、インド、中国などが、住民の圧倒的多数を占めているにかかっている。ところがまさにこの多数の住民が、近年、異常な早さで、解放闘争に引きいれられており、したがって、この意味では、世界的闘争の終局的な解決がどうなるかについては、いささかの疑問もありえない。この意味では、社会主義の終局的な勝利は、完全にまた無条件に保障されている。

だがわれわれの関心を引くものは、社会主義の終局的な勝利が不可避的だということではない。われわれの関心を引くものは、西ヨーロッパの反革命的諸国家がわれわれをおしつぶそうとするのを妨げるために、われわれロシア共産党が、われわれロシアのソヴェト権力が、とらなければならない戦術である。反革命的帝国主義的西欧と、革命的民族主義的東洋との、世界のもっとも文明化された国家と、東洋風におくれた、だが多数を占めている国々との軍事的衝突がつぎにおこるまで、われわれの生存を確保するためには、この多数は自分の文明化に成功することが必要である。われわれにとっても、直接に社会主義に移行するには、そのための政治的前提があるとはいえ、やはり文明が不足している。わ

れわれがすぐわれるには、われわれはこのような戦術をとり、あるいはまた、つぎのような政策をとらなければならない。

われわれは、労働者が農民にたいする指導と、自分にたいする農民の信頼を維持することのできる国家、われわれの社会関係のうちから、最大の節減によって、むだというむだはなにによらず、跡形もなく根絶することのできる国家を建設するようにつとめなければならない。

われわれは国家機構を最大限に節減しなければならない。われわれは、帝政ロシアから、その官僚主義的＝資本主義的機構からひきつづいてたくさんのこっているむだなものの跡形をすべて国家機構から根絶しなければならない。

これは農民的偏狭さの支配ということになりはしないだろうか？

いな。もしわれわれが、農民にたいする指導を労働者階級に保障してやるならば、われわれは、わが国内の経済をこのうえなく節約するという代価を払って、われわれの機械制大工業を発展させるため、電化、水圧利用泥炭採取を発展させるため、またヴォルホフ河水力発電所建設工事その他をやりとげるために、たとえどんなにわずかであろうともあらゆる貯蓄をするようにつとめる可能性を得るであろう。

ここに、そしてここにだけ、われわれの望みの綱があるであろう。そのときにはじめて、われわれはたとえで言えば、一つの馬から他の馬に乗りかえることができるであろう。すなわち、農民的・百姓的<sup>ムジーク</sup>な、零落した馬から、破産した農民国を目当てとした節約の馬から、プロレタリアートが自分のために探しもとめ、また探しもとめざるをえない馬、すなわち、大工業、電化、ヴォルホフ発電所建設、その他等々の馬に乗りかえることができるであろう。

だからこそ、私は、自分の考えのなかで、われわれの仕事、われわれの政策、われわれの戦術、われわれの戦略の一般計画を、労農監督部の改組の任務と結びつけているのである。ここにこそ、労農監督部に異常に配慮し異常に注意をはらうことが、私にとって正しいとおもわれる理由がある。労農監督部を異常な高さにたかめ、中央委員会の権限をもった頭部をこれにあてる、その他等々することによって、われわれはこの配慮と注意を、労農監督部に割かなければならないのである。

私にとって正しいとおもわれる理由は、われわれの機構を最大限にきよめ、また機構のなかで絶対に欠くことができないといえないものは、すべて最大限に節減することによってのみ、われわれは永久に持ちこたえることができるであろうという点にある。しかもわれわれは、小農民的な国の水準、この全般的な偏狭さの水準のうえではなく、機械制大工業をめざしてたゆむことなく前進し向上しつつある水準のうえで、持ちこたえることができるであろう。

私わがわが労農監督部にあたえようと夢想している高い任務は、以上のようなものである。私がこの部のために、もっとも権威ある党機関を「普通の」人民委員部と融合させようと計画しているわけは、ここにある。

1923年3月2日

第33巻『量はすくなくとも、質のよいものを』P522～524

『プラウダ』第49号、1923年3月4日